

平成 28 年度 第 1 回屋久島世界自然遺産・国立公園における山岳部利用のあり方検討会
議事録

日時：平成 28 年 12 月 25 日（日） 10:00～12:30

場所：屋久島離島開発総合センター 第 1 会議室

◇ 検討会開催の挨拶

環境省九州地方環境事務所国立公園課 北橋課長：屋久島が国立公園になってから 50 年、世界遺産に指定されてからも 20 数年が経つ。その間、登山者数、入島者数はかなり増えており、最近では若干の落ち込みはあるものの、人が増えるのにしたがって、山岳部に対する様々な施設整備も関係行政機関、民間の方の協力も得ながら進められてきた。

一方で、国立公園、世界遺産として、それぞれ行政側としては基本的な方針をもって従来から臨んできたが、山岳部の個別の路線に対して、こういった形でこういった利用をしてほしいというしっかりとした方針は打ち出してこなかった。これまでは有名になっていく中で、特に縄文杉を中心としてたくさんのお客さんがこれ、路面の整備、トイレ整備など様々な不具合が生じてくることに行政側が対応してきたという歴史がある。

これからも、屋久島空港の延伸、それに伴う首都圏からの直行便が来るのではないかとという話もある。このようなタイミングで、再度屋久島の歴史も振り返りながら、屋久島の山の利用がどのようにあるべきかを地元の皆さんの意見も伺いながら考えていきたいと思っている。首都圏の山岳用品店では富士山と屋久島のパンフレットが陳列され、山を始めようという人が屋久島へと誘導されているというところがあるが、屋久島の山のどこに、どんなレベルの方を迎えるのか、山岳信仰も踏まえて、屋久島ならではの山に対する付き合い方を、地元の方の意見を伺いながら考えていきたいと思っている。今日はその第 1 回ということで、過去も振り返りながら皆様と共通認識を図っていきたい。

土屋 座長：私が初めて屋久島に伺ったのは 1977 年 3 月の大学卒業時に、「屋久島に行こう」と言って、グループで宮之浦岳に登った。それから 40 年、時々来島しており、特に最近では若き同僚である柴崎先生にも色々教えて頂き、屋久島のあり方について自分なりに考えてきたつもりである。またこの 2 年ほど世界遺産地域の科学委員会にも混ぜていただいている。科学委員会では、今回の検討会そのものではないが、こういった形でたくさんの方の関係者の方が集まり、山岳部に限る必要はなく、山岳部も含めたところについて長期的なもしくは総合的なあり方を考えていくことは必要ではないかというような意見は述べてきたところである。今回こういった検討会ができたということは非常に喜ばしいことであると思う。

本検討の、スケジュールは 5 年という長期を構想しており、たくさんの方の関係者の方が集まって 5 年間でじっくり検討するというのは、大変なことではあるが非常に重要なことだと思っている。これから皆さんで真剣に、且つ和やかに議論を進めていければと思う。有識者委員は吉田委員、柴崎委員、土屋であるが、他の皆様も全員委員であり、発言の機会は全員平等にある。同じようにオブザーバーについては、座長が意見を求めることができるが、大山先生、日下田先生は科学委員会で同僚であり、自由に発言をお願いしたいと思っている。しかしながら、時間が限られているため、今日全てを議論することは無理なので、今回はこれまでの議論や事実がどうだったのかということをご皆さんで共有する場になると思う。これからじっくり進めていく第一歩、言うなればキックオフと考えていただければと思っている。

◇ 資料 1 について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：本検討会設置要綱（案）の第 1 条から第 7 条までを説明。

【質疑・応答】

鹿児島県自然保護課 長田課長：質問は 2 点ある。一つ目は第 2 条（2）で、利用に関するゾーニングの設定とあるが、ゾーニングというのは島全体という山岳部を塗り分けるようなイメージでのゾーニングなのか。もしくは、必ずしもそこまで決まっていなかったのかということを確認したい。登山道の管理のあり方や整備水準を検討

するときには、登山道ごとに検討するというのもあって、ゾーニングという言葉のイメージと若干ずれる部分もあるかもしれない。過去に何かの会議でも申し上げたことがあったと思うが、それについては、広い意味でのゾーニングということであれば良いのかと思う。もっと細かい話だと、ゾーニングという言葉はゾーンを設定するというのがゾーニングという言葉で、ゾーンの設定及びゾーンごとの目標になるのかと思う。

二つ目は第6条にある事務局については、九州事務所より委託された者が務めるとあるが、九州地方環境事務所なのか、受託者になるのかどちらか整理していただけたら良いと思う。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：一つ目、第2条（2）ゾーニングの件については、書き方としてのゾーニングの設定というのはおっしゃるとおりと思う。ゾーニングというと面としてゾーン設定するイメージになってしまうが、今のところ面としてやるという明確な考え方というよりも、登山道のルートごとというイメージをもっている。この部分は先行してH26、27年度も検討作業をしてきたが、まだはっきりと固めていない部分はある。

二つ目、6条の事務局の部分は、実際には九州地方環境事務所と九州地方環境事務所から委託をされた者が務めるということになるので、ここは書きぶりを修正して、「検討会の事務局は、九州地方環境事務所及び九州地方環境事務所より委託された者が務める」と修正する。

◇ 資料2について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：大きく前半と後半に分けて書いており、前半が3ヵ年で基本理念・基本方針、ゾーニングを行い、後半では施設整備・維持管理、利用者管理・サービスについてやっていきたいと思っている。今年度は、屋久島の歴史、社会状況変化、登山利用推移や課題その他について皆で共有した上で本格的な議論に入っていきたい。

◇ 資料3について

【資料説明】

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：検討会の設置趣旨と検討内容について説明。成果物イメージとして、資料4-4-2～4-4-5に他地域の事例を添付している。成果物骨子イメージにあるような成果物を作りたい。

【質疑・応答】

土屋 座長：他地域の事例については、ゾーニングまでは踏み込んでいない。知床は、一応エリア分けはしてあるが、資料3には、今回の検討会の一つの目標である利用ゾーニングとあるが、国立公園で地種区分という保護の区分があり、それと重なる部分は当然あると思うが、利用に基づくゾーンを作っていくことを目標にしていると感じているのか。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：そのように理解していただきたい。参考資料としてつけた知床の計画は私が知床にいるときに作成されたもの。利用適正化基本計画として作って、最初に構想を作ったうえで基本計画を作り、コンセプト、理念を作ったところは良かったが、それで実際何が変わるのかというところが当時はなかったと思う。自分でやりながらも反省点があった。このため、屋久島ではまずは基本的な理念のようなものを作った上で土屋座長がおっしゃられたような利用に関するゾーン設定をする。ゾーン設定は、コースごとになるかもしれないが、ゾーンごとにどのような利用方針を立てていくかということを検討した上で、それに基づいて施設の整備、維持管理、利用者管理、利用者へのサービス提供を考え、実施することで現場の利用者管理やサービスや施設整備、維持管理が変わっていくところまでやりたいというイメージを持っている。

この検討でできてきたものは、国立公園の管理・運営計画、国立公園の地域整備計画、環境省が施設整備をする計画、世界遺産の管理計画、そういったものに反映させられるものは反映していくという形で考えている。

吉田 委員：土屋座長の質問は、スケジュール後半部分の具体化のところについての内容だったが、私はもっと前の山岳部の適正利用に関するビジョンについて質問したい。会議の性格からいって世界遺産や国立公園のビジ

ンからやるのは難しいので山岳部の適正利用の議論から始まるのは理解できるが、2016年、屋久島は、世界遺産の面でも、国立公園という面でも、非常に大きな転換点にある気がする。そういった中で島全体の保全と利用、あるいは観光も含んだ利用を議論する、世界遺産や国立公園のビジョン作りの機会がどこにあるのかを知りたい。それが無いのであれば、ビジョンについてもある程度議論しないと、山岳部のビジョンだけでは済まないのではないのかと思う。

世界遺産と国立公園に関して、まずは世界遺産については、1993年に登録された当時は顕著な普遍的価値をしっかりと守る、登録された範囲をきっちり守るということだった。世界遺産条約自体が少しずつ変わってきて、特に2012年の世界遺産条約40周年のあたりから持続可能な発展や地域住民の参加も非常に重視されてきている。私は、日本自然保護協会に在籍していた1993年、屋久島が世界遺産登録された年に、MABのバイオスフィアリザーブ(BR)の考え方を取り入れて、もっと世界遺産の外側まで含んだ島全体の管理計画にすべきではないかと提案した。当時は管理計画がなく1995年になってからできたが、その当時は時期尚早ということで、管理計画は世界遺産登録の地域のみであった。この考え方は突然出てきたわけではなく、実は屋久島環境文化村構想の中で、奥岳エリア、前岳エリア、あるいは住民の生活エリアという3ゾーンに分けるという考え方があり、その中から国立公園協会の大井理事長の「世界遺産登録が望ましいのではないか」という発言がきっかけとなって世界遺産登録に向けていった経緯がある。屋久島環境文化村構想は世界遺産として結実したが、屋久島町でも鹿児島県でも頑張っているとは思いますが、島全体のビジョンはまだ実現はされていないのではないのかと思う。2016年3月にはユネスコエコパークが全島に広がり、口之永部島まで広がったということで、島全体のビジョンを考える土壌ができた年だと思う。そういった見直しに基づいて山岳部を考えるというようにしないと、山岳部に来る方は麓から登ってくるわけなので、島全体のビジョンを考えることも必要であると言いたい。

国立公園については、利用者減少対策は屋久島に限らず他地域でもやっている。昨年の国勢調査の結果が10月に発表されたが、総人口は減少に転じて96万人くらい減っている。利用者が減っていくのが普通であって、どこも減っている。だから利用者を維持しようとか増やしていこうとか元に戻していこうとかいうのであれば、単なる量ではなく質を考えないといけない。もちろん羽田直行便の就航など、一般の観光客は交通機関の変遷によって影響されると思うが、登山者数となるともっと外国人の登山者にも来てもらう山にするとか、そういうことも含めて考えていかなくてはならない。2000年に日本自然保護協会が『豊かな自然・深いふれあい・パートナーシップ～21世紀の国立公園のあり方を考える～21世紀の国立公園への5つの提言』出した。一つ目に、国立公園は日本を代表する生物多様性保全の場にするという提言については、法改正で目的の中にも生物多様性の確保が入った。二つ目に質の高い豊かな自然のふれあいの場として必要なサービスを提供するという提言をした。これはいくつかの国立公園ではやっているところがあるが、日本の国立公園でこれを達成しているのはほとんどないと思う。日本の国立公園、特に屋久島国立公園が、質の高い豊かな自然とのふれあいの場であり、それに対する必要なサービスが提供される場になるということを実現してもらいたいと思う。また、そのモデルになり得るところだとも思う。

最後に、2010年に名古屋で生物多様性条約が開かれ、愛知目標が採択された。その11番が保護地域の面積を増やすということだ。面積を増やすと言うことだけが強調されているが、陸域17%という面積については、日本は既に達成している。このため、量の問題ではなく質の問題が重要であり、その中で良い管理がされていくことが非常に大事である。世界自然遺産の評価をするIUCNは、IUCN保護地域グリーンリストというものを導入して、良い管理をしているところを認証している。そういう面で、屋久島はまさに量より質であってほしい場所だと思う。もちろん量も大事であるが、質をしっかりと保ち、高めるということがこれからの課題であり、これらを実現できるような検討内容、プロセスにしてもらえればありがたい。ここまでの提言についての資料は提供する。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：島全体で考えていく必要があるというのは、そのとおりだと思う。世界遺産科学委員会の中でもそのようなご指摘をいただいている。それは承知しているのだが、私たちが担当しているエリアは国立公園や世界遺産であるため、国立公園、世界遺産を中心として、登山道等で関連があるという周辺地域までという形で検討範囲としている。島全体で将来的なビジョンを考えたものには屋久島環境文化村構想がある。これには奥岳エリアとその周辺部があるが、奥岳のエリアの部分をもどのような考え方で保護や利用していくのか、利用体験を提供していくのかという部分を、環境文化村構想よりも、もう少し具体的に本検討会

で中身を考えていくというようなイメージで考えている。吉田先生からご指摘のあった2000年の自然保護協会の21世紀の国立公園の提言は見させていただき、今回のこの会議を立ち上げるにあたって、意識、留意はしている。これから、それをどのように実際に反映させていくかということは、この先の課題ということになるため、引き続きご指導いただきたい。

柴崎 委員：吉田先生の屋久島全体のビジョンづくりという意見は、まさにそのとおりだと思う。検討会などこういう場で議論することも一つのやり方だと思うが、民俗学とかの分野で昔から言われている、身体化では実際に経験をすることによって色々なことが身につく。この検討会に、少し身体化の考え方を入れた方が良いと思っている。委員も検討会で意見を言うだけではなく、実際に山を歩いてみたり、里の観光地を見てみたりして、その上で意見を言うていく必要があるのではないかと思う。そうしないと表面だけの計画になってしまい、実態が伴わないということになりかねない。全ルートは難しいが、奥岳も含めてあまり歩かないルートも歩いた上で、答申、意見をしていた方が良くと思う。要望と言う形であるが、予算があるか作業部会があるか分からないが、歩く人たちも必要だということを申し上げたい。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：まさにその通りだと思っている。屋久島の場合は、縄文杉に行く荒川登山口から縄文杉までのルートについても、GWやお盆など一番混んでいる期間と混んでいない期間、時間帯では全然違う。それ以外のマイナールートと言っているのか、あまり人が行かないようなルートだと利用の状況が全然違ったりするというのは、行ってみないとなかなか分からない面もある。今年度は難しいと思うが、次年度以降にそういった機会を設けることができるように検討したい。

資料2の説明から漏れていたが、検討会は今年度2回、29年度以降は3,4回開催予定と記載されており、検討会の間に有識者の方のヒアリングや必要に応じて色々な地域の関係者の方の意見交換会のようなものを行い、より詳しく知りたい部分や、そういったものを補足しながらやっていこうと思っている。柴崎先生の提言された、現地を見ることも、そういうアクションの中の一つとしてあるべきと感じた。

土屋 座長：国立公園の外まで含めて伝統的な利用についても考える必要があるのではないかという意見と、それから現地を見ながらやはり議論すべきだろうという意見には、私もどちらも非常に重要であると思っている。環境省の権限の問題や、お金や時間の問題もあるかと思うが、どちらも長期間でこれを検討する中ではどうしても考えるべきで非常に重要であるため、ぜひご検討をお願いしたい。

◇ 資料4-1について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：登山道、様々な保護地域、山岳部施設を示した図面類についての説明。

◇ 資料4-2-1～資料4-2-3について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：屋久島町の歴史、屋久島町の社会経済、屋久島町への入込推移についての説明。

【質疑・応答】

土屋 座長：膨大な資料についての説明があった。このような資料がないと話が空中戦になってしまうので、これからの議論のときもここに帰って事実に基づいて議論することが必要だと思う。これについては意見というか、分析をしていると時間がかかってしまうので、データのここがおかしいというような箇所があったら、伺いたい。これらの資料をどのように解釈するかという話は、二回目以降に詰めていきたいと思う。

柴崎 委員：資料4-2-3に関連するが、自分自身の先行研究データもあり、入れ込みに占める観光客の割合みたいなものを過去にとっている。これらのデータを提供するので、提供したデータを踏まえて資料4-2-3のP17のモニタリングのほうにつなげてもらいたい。

熊毛支庁屋久島事務所 福永屋久島事務所長：資料4-2-2のP10について、平成12年度の屋久島町の就業人口全体が極端に増えているので、確認してもらいたい。

事務局 日本森林技術協会(高橋)：熊毛支庁の「熊毛地域の概況」からの数値を使っている。表中の、第三次産業の数値について平成11年4,253人から平成12年6,693人、それからまた平成13年には4,294人と下がっており、恐らくここの数値の記載ミスかとは思いますが、確認していなかった。

土屋 座長：それでは、数値については確認をお願いします。後で気づいた点、またこのような資料があるから加えて欲しい等あったら事務局に伝えてほしい。

◇ 資料4-3-1～資料4-3-3について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：登山者数の推移、屋久島と全国の遭難状況についての説明。

【質疑・応答】

土屋 座長：この検討会で一番中心となる議題についての資料提示だった。先ほどと同じように、これについても解釈や分析は、今回はできないので、データについての誤り、こういったデータがある等の意見をお願いします。

柴崎 委員：遭難はかなりレアなケースかと思うので、氷山の一角で恐らくヒヤリハットみたいな事例が多くある。ヒヤリハットがどんなものかを推測するためにも、もしかすると実際に遭難が起きている場合の定性的な情報も少し参考にしたいと思う。統計自体は良いのだが、数だけみると分からない部分が東部の発生事例が非常に少なく、変動もポアソンの確率で起きたりするのでいくらでも変わりようがある。定性的な部分も見えていくと、より深く見えていくのではないかと思った。

土屋 座長：出席者の中に山岳部について詳しい方もいらっしゃるので、これについての意見をもらいたい。

屋久島町 木原自然環境係長：遭難件数は少ないということだったが、町のほうでは救急活動がこの中に含まれているかどうか疑問に感じた。データは分遣所の方におそらくあると思う。発生や、こういった救助をしたのか、そういったものも含めていくと、もしかすると山岳部の対応の捉え方も変わってくるかと思った。

◇ 資料4-3-4について

【資料説明】

事務局 日本森林技術協会(高橋)：屋久島の課題の変遷についての説明。

【質疑・応答】

土屋 座長：資料4-3-3までは事実の確認だったが、資料4-3-4については事実に基づいた課題についての説明があった。ある意味で言うと「課題」は、立場や個人の考えで色々な解釈ができる部分を含んでいる。これについてもそれぞれについて深く議論はできないが、課題が解決したとする認識がよいのかどうかについて、もし異議、異論、あるいは賛同があれば、この席で出していきたい。それからここまでの資料についても、事実等について質問や修正点等あれば、時間をとって発言を出してもらいたいと思う。

大山 オブザーバー：資料4-3-4の3Pにある「植物の盗掘の問題」について、ここではパトロールが頻繁に行われるようになって盗掘が減ったという報告になっているが、実際はそうではないのではないかと考えている。それまでは趣味の段階で植物収集というのが非常に盛んだ。珍しいほど、よく盗られた。そのときに屋久島は野生のやつはずいぶん盗掘があった。そのブームが去って、最近盗掘はほとんどされていない。もちろん監視のこともあるかとは思いますが、もう一つは盗掘が減った一方でシカの食害が増えてきている。原因について、このグ

ラフでは平成 25 年の前で止まっているが、本来的なものを求めていったほうが良いのではないかと思う。

事務局 日本森林技術協会(高橋)：シカの影響については、調査時にシカの影響から恐らく盗掘されるものが少なくなってきたのかという感覚はあったが、特にデータ蓄積があったわけではないので、資料としての根拠にできなく記載していない。また今回この問題点について、これは平成 15 年で終わっていると思われるという表を作っているが、これについては山岳部利用対策協議会のほうで議論されている議事録を読み、そこで議論がなくなっている部分に関して大体この辺で切っているという表現をしている。恐らく読み取りが浅かった部分もあるかとは思うので、その部分は指摘をいただきたい。

土屋 座長：課題の変遷についての表現の仕方等を、少し検討してもらいたい。

柴崎 委員：資料 4-3-4 の屋久島の課題の変遷のところで、いくつか追加した方が良かったところがある。一点目には、P1 の登山道のところで主に縄文杉ルートの話があるが、科学委員会で最近出ている議題としては、奥岳ルートが一部荒廃している問題も議論されているので、奥岳が全く問題ないわけではないため、そこについても書いたほうが良いのと思った。二点目は、資料 4-3-1 に関連すると思うが、いわゆる公園計画上、登山道となっていないところの遭難が結構起きている。具体的には石塚山とか花折岳のところは恐らく公園計画上では道にはなっていないはずである。それ以外にもトーフ岩、高盤岳、あちらにもルートができていたりする。私が 2008 年か 2009 年に太忠岳登ったときに、花折岳にルートが開拓されたような跡を見つけて、科学委員会で発言したような気がするが、そういう問題が実は起きていて、それらがなんらかの形で石塚山、花折岳の遭難に結びついている可能性がある。このあたりの整合性をどのようにとるのかを課題にした方が良くと個人的には思うので、ルート開拓の問題は入れたほうが良いと思った。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：資料 4-3-4 の P5 その他のところのマナーについて、ゴミの投棄があるが、そもそも屋久島の登山道はずっとゴミが落ちていなかった。たまにポケットから落ちたような飴の殻のようなものはあった。そもそも山岳部に関してゴミの問題というのはそんなになかった。逆にゴミの問題が元々あったという誤解を招くかと思った。

土屋 座長：今のゴミの問題は引き続かないという形になるかと思う。

屋久島山岳ガイド連盟 古賀代表：イレギュラーでたまにあるくらいで、そもそもそんなに大きな問題にはなっていない。私に関わった事例では、世界遺産になった他地域ではゴミが増えたので、屋久島も世界遺産になったのでゴミが多いのではないのかというような、現地を見ないでゴミが多いというメディアのイメージが先行したと個人的にそう認識している。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：私は屋久島に来てまだ 2 年足らずだが、登山道を歩いている限りではゴミが落ちているということがあったらそれはとてもレアケースで、大体落ちているものを見ると、ポケットに手を突っ込んで出すときに知らないうちに落ちてしまった、飴とかの包み紙程度で、今時点ではあまりゴミの投棄が問題だと思ったことはない。

事務局 日本森林技術協会(関根)：山小屋のトイレの糞尿、し尿を搬出している業者の方に聞いたところ、ここ 5,6 年くらい前から GW や夏の時期にトイレにゴミをたくさん投棄する事例がどんどん増えてきているということがある。それが影響してトイレが詰まったり、それが顕著であるという話は伺っている。

土屋 座長：今のトイレのごみが増えたというのは新しいところだと思う。

日下田 オブザーバー：以前に縄文杉ルートの利用に関する検討会があった。本来その会は現状並びにそれに対する対応、さらに将来展望の認識を共有するという目的が大きかったと思うが、議論を進めているうちにその会

そのものが利用人数の是非論に迷い込んでいってしまった。様々な手法を平たく検討するという場がだんだん失われてきて、自ら人数論に落ち込んでしまい、関与した行政もそっちに迷い込んでしまったのではないかと非常に残念だったと思っていた。この会議に期待するところは、そのような狭い手法論に迷い込むことなく、状況を共有して将来展望を開く道筋を探し求めるという範囲で努力したら良いと思い、大いに期待する。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：縄文杉ルートは利用の量もとても多い。次回以降は、平成23年の町の条例の否決、縄文杉の利用やその対応がどのように移り変わっていったのか、もう少し深掘りできたらと思っている。今おっしゃられたように、数の是非だけに落ち込んでいけないように注意しながら、どのような変遷を辿って今に至っているのかを含めて洗い直して、課題として整理していきたいと思っている。

土屋 座長：日下田さんの話は、事務局だけでなく今回参加している全員である程度共有してやっていかないと、こういう議論はいつまでもそういうところへ落ち込んでしまうということがあるので、是非皆で気をつけながら、幅広く且つ課題を絞りつつやっていければと思う。

鹿児島県自然保護課 長田課長：まさに先ほど日下田さんがおっしゃったとおりでと思っているが、いろんな議論がまさに今動いていて、色んな協議会が屋久島にありそれぞれの課題を議論している。大きな話だと、エコツーリズムの推進全体構想をまた改めて議論し始めるということがエコツーリズム推進協議会の方で話が出ている。議会で否決された縄文杉ルートへの人数制限については、今の段階でどう取り扱うかは白紙だと聞いているが、恐らくその是非、あるいはどこがまずかったのか、その人数制限そのものなのか、手法だったのか、当時の合意形成プロセスだったのかを含めて、やはりいろんな議論が最終的に大きな議論をしていくこの会議と連動して個々の協議会の取り組みとすり合わせていく必要があると思っている。そのときに細かい話とかの議論に迷い込むことなくというのは非常に的確な指摘をいただいたと思っている。ここでは大きなところからその方向性を議論していく。これは5年かけてやっていくが、それまでの間には、来年の3月からは山岳部の協力金1000,2000円をいただくという動きが具体的に始まってくると、マイカー規制協議会と山岳利用対策協議会の統合という話も動いてくるというようなことがある。また山岳部の利用集中を避けるための、例えば里巡りの協議会が動き出していたり、あるいはMABユネスコエコパークに関連して周辺地域の活用のあり方みたいなこともこれから議論が進んでいくと認識しているので、この会議自体は環境省が事務局をしているが、それぞれ様々な協議会があってそれぞれの事務局があって、それぞれここでこういう大きい議論が始まったことを意識しながら自らの取組もそこにすり合わせていく、あるいは両方の議論にずれが生じてきたときに積極的に発言なり関与なりして、全体として整合のとれた取組をしていくべきであると自分自身に対する認識としても強く感じた。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：私も屋久島に来て色々な協議会がたくさんあって、正直驚いた。一体いくつ会議に出ればよいのかという感じだが、この検討会を立ち上げるにあたって、一つ留意することは、この会議以外の協議会や検討組織といかに連携というかすりあわせをしていけばよいかというところは、これから考えながらやっていかなければいけないと思っている。

土屋 座長：非常に重要な指摘だったと思う。「屋上屋を重ねる」という言い方もあるが、そのようにならないよう、総合的な調整を行う形でこの検討会が動くことを、全員で協議していかなければいけないと思っている。

吉田 委員：資料4-3-4のP5雰囲気のところ、良好な雰囲気の喪失、利用体験の質の低下というのは具体的にはどのようなことを表しているのか。

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：これは主として縄文杉のことが一番分かりやすいかと思うが、GWや夏休みお盆シーズンなど人がたくさん来る時期に、縄文杉に4~5時間かけてやっと思ったのに、縄文杉を見るデッキの上が非常に混雑して列ができてゆっくり見る事ができない、又はそこにたどり着くまでの間のトイレにも長い行列ができていているというような状態をイメージしている。

吉田 委員： P3ではなくP5に書いてあるので、縄文杉以外のことかと思いましたが、こういった混雑が植物の根の踏圧だとかそういった物理的な影響を与えるレベルと、そこまではいかないにしても非常に混雑感があって、この利用の質が低下するという問題が別のシートではなくて、同じ現象のレベルの違いなのかという感じもするので、私にも誤解があるかもしれないが、今後の検討の中で考えてもらいたい。

土屋 座長：今の質問に関連するが、雰囲気という言葉でも少し誤解を招くところもあり、「利用体験の質」の方が項目でも関係するので、良いかと思った。

屋久島町 松本商工観光課長：観光の立場から屋久島の現状について発言する。先ほど長田課長のおっしゃったように色々な協議会があり、屋久島山岳部利用対策協議会というのは地元の方のここにいらっしゃる方々もほとんど関わっている会で、これとの整理をどのようにする予定なのかと思った。その中でも吉田先生の屋久島全体をとすることは、ことあるごとにおっしゃっていただいているのだが、なかなか進んでいない。またこれに期待しないといけないのかというのが本音である。平成19年に入り込みピークがあり、それからずっと坂から下ってきたわけではなく、やはり色々なことがあった。ここ数年は口之永部島噴火や熊本地震の件もあって、観光という意味ではショッキングな出来事だったのだが、この7月くらいからはようやく数字上は元気になってきている。それで一説では来年の春くらいまでは、ある程度少し見えている業者さんもあるように聞いている。そのように少しずつまたお客さん戻ってきているという実感もある。まさにそういうタイミングでまた増えていくことが、私共観光のセクションにとっては大切なことになるので、質も必要だが、量も当然必要になる。来年、観光協会の皆さんと元気を出そうということで色々な準備をしているところで、機会あるごとに皆さんのところで色々なお話ができればと思っている。観光というのは環境を語り出すとどこかへいってしまうので、ぜひ良い機会なので一緒に考えてもらいたい。私共もそういう部分での情報提供をどんどんしていきたいと考えている。良い観光地でありたいということが結果的に我々の望みなので、まさに今年がそういったターニングポイントにありそうな気がしており、議論の中で皆さんのお知恵をいただければと思った。

屋久島区長連絡協議会 泊会長：平成10年～17年にかけて旧上屋久町で縄文杉の一極集中を避けようということで龍神杉開発を行った。雇用促進の補助金がついたときだけという形で、だいたい11月頃から冬の間、林野庁の神之川林道の途中から元林野の方々が集材した場所までは車で行き、そこから登って大体1時間半で龍神杉まで行ける。その途中の山道は、楠川林道の石積工法を取り入れて私がリーダーとなり、人は雇用対策したから変わっていったが、7年間かけて作った。ただし尾根に取り付くところから予算がないということでやめているが、あと何百メートルかやればずっと石積みで入り口から龍神杉まで行ける。私の名刺の中に雪の中の龍神杉の写真を載せてある。山尾三省さんが縄文杉を聖老人と言っていたが、大変若々しい龍神杉は青年のようである。大変良いところがあるので、(地図を広げて)神之川林道からのルートになる。大変良いところなので委員の皆さんも一回機会があったら行っていただきたいと思う。今後も、ぜひ活用していただきたいと思っている。

土屋 座長：泊会長の名刺を見たら、確かに雪の中に大きな杉が写っている。私はまだ行ったことがないので近いうちに行ければと思う。

屋久島レクの森保護管理協議会 日高事務局長：屋久島には協議会が多くあり、レク森協議会もその一つになる。レク森協議会の中にも問題が多く、その中でも特に全体の中で協議していただきたいことがある。例えば冬は積雪によって通行止めになったり、また大雨のとき警報が出たりしてバス会社がバスを止めることがある。この場合は、観光客を送って、帰りにバスが出ないということになる。これはレク森だけではなく、例えば荒川登山口とかそういったところもあるかと思うのだが、そうした場合、例えばヤクスギランドに来たお客さんをレク森の職員が送らざるを得なくなる。そういったこともこの会の中で協議していただければありがたいと思う。

土屋 座長：これから追々そういった問題についても議論していくことになるかと思うが、はじめはもう少し、一般的なところから進めていって、だんだん個別に入ってくるのではと思っている。

◇ これからの進め方について

屋久島自然保護官事務所 田中首席保護官：これについての資料はないが、次回の会議の進め方について説明する。本日は色々なデータを説明したが、まだこれで全部ではない。山岳部のトイレ関係は今日の資料としては出していないので、今現在これがまだというものを次回は出していきたい。課題関係については、今日は資料をこういう形としたが、意見も踏まえて、少し整理をした形にして、課題がこういう課題でいいのかということも議論することと、課題も踏まえてこれから山岳部の適正な利用のビジョンを作っていくに当たって検討すべき論点の案のようなものを次回は出して、それについて議論できればと思っている。プラスアルファして、今日は資料を駆け足で説明したが、それぞれの資料についての現状認識という形でもう少し文章化した形として、そういう認識でよいかどうかということまでできればありがたいと思っている。

柴崎 委員：文化的な話をしていないので、また中川さんもいっちゃっていないので、一つコメントしておきたい。岳参りや国立公園内で行われる文化的な行事や風習、歴史的な価値あるものについての取扱いについても議論すると同時に、世界遺産、ユネスコエコパーク、国立公園、原生自然環境保全地域、特別天然記念物などの上からの枠組みによるゾーニングの設定はたくさんされてきた。しかし、地域性公園で独特の文化を持っている以上は、地元の人たちがもっているものさしを育てるような視点がとても重要ではないかと思う。具体的に言えば岳参りでシャクナゲの枝を取っていくということは国立公園等が設定される前からあったのだが、それについて現況では非常に申し訳ない感じで伐っている人もいる。地域性公園であるならば、地元の方々のものさしを育てる、エンパワーメントと言うか、「尊重する」という言い方が良いのかもしれないが、そういう仕掛け作りということも検討会で議論していく。そのためには単にレクリエーションだけではなく、地元の人々の利用ということも軸として入れてもらえればと思う。

吉田 委員：最初のほうで確認しておけばよかったのだが、屋久島国立公園が独立した国立公園になるにあたって、公園計画との整合性は非常に大事だと思う。今日の資料の中には、尾瀬はビジョンという名前を出しているが、やはり公園計画という落とし込んだゾーニングになる前のビジョンが非常に大事だと思う。これまでそういったものについてどういう議論がされたのか、それはあるのかなのか、そのへんはぜひとも次回に出して、整合性のある議論ができればと思う。

大山 オブザーバー：岳参りの話が今出たが、一方で確かに岳参りを大切にするというのも大事ではあるが、本来的に例えばシャクナゲの枝を切るという行為が果たしてどこまで許されるのか。例えば永田岳の岳参り行くときは、昔は周りのシャクナゲやヤクスギを全部切り倒して一晩中どンドン燃やしていった。過去が必ずしも良いものばかりでなく、悪い面もある。そのため、これから屋久島がどう生きていくのか、どういう島作りをしていくのか、屋久島の人間がどれだけの経済性をもってやっていくのか、というもう少し民意的なデータも集計してほしい。例えば所得を10年後に150万を300万まで上げたいとか、観光客が何人来れるのか、地元の住民がどれだけを欲しがっているのか、行政がどこまでまとめているのか、そういう具体性が全然出てこない、分かってないということもある。そういう中で、このような会議で話が進んでいくので、全部住民の頭上を通過していくだけで、一向に実現化されない。もう少しそういう視点に立って具体的に答えが出るようにしてもらいたい。例えばゴミの問題では、3日ほど前に私がヤクスギランドの中を歩いて、スギかモミの森に10~20m入ったのだが、そこに行くのとトイレをした後がちゃんと残っていた。世界遺産になってルート以外に入ると人が見ている、またルート以外に入ることが悪いというのがあるから、なるべく入らないようにしているが、一方で話を聞くと、少し道を外れるとウィルソン株の周りにはあちこち糞尿後やゴミを捨ててあるというような話も聞いている。どちらが正しいか分からないが、やはりそういうところも実証しながらやっていって欲しいと思う。

土屋 座長：質問、意見に出たビジョン、基本的な理念・方針のようなところは、これまでの国立公園の他地域でも非常に欠けていた部分であり、そのところは今回の一番重要な論点になるかと思っている。その中で少し議論があったが、山岳だけでなく、もともと屋久島にある様々な自然に関わる文化的な面、そういう面をどう扱うかが非常に重要である。例えば奄美の場合は環境文化強く打ち出したことが評価されている。今日も議論に出たように屋久島の環境文化村構想がだいぶ前に出されているという歴史もあるので、今回の屋久島についてもそう

いう面も含めた総合的な面からのビジョン作りというのがまず大事ではないかと個人的には考えている。長い取組となるため、そうした面も議論する余裕があると思うので、よろしくお願ひしたい。資料が膨大であるので、皆さんも意見・質問したかったかと思うが、それらは事務局のほうに届けてもらうことで、検討会での議論が豊かになると思う。会議に出るだけではなく、会議と会議の間にも委員として色々なことを考えたり、助言をもらいたい。

◇ 検討会閉会の挨拶

環境省九州地方環境事務所国立公園課 北橋課長：今回はスタートアップということで、様々な資料をもとに全員で共有する土台となるところを共通認識として持ってもらうというところで、第一回目検討会を開催した。屋久島をめぐる問題は幅広いので、今年度の第二回もほぼ同じようなスタンスで、残るところを議論していくことが中心になるかと思う。

こうした共通認識をもとに目標に向かって議論していくことができるよう皆様に意見を出してもらいながら議論を詰めていきたいと思っている。柴崎先生からもあったが、地元の方々がどのように考えてこれまでやってきたか、そういう文化的なものもしっかりと踏まえて議論していくために、引き続きご意見、ご協力をいただきたい。